

平成15年度 拓殖大学修士論文

インドネシア日本語学習者のための中級教材開発

—朗読教材を通じて言葉の意味をとらえ、

文章アクセントの流れを学ぶ—

言語教育研究科 日本語教育学専攻

JUARIAH

インドネシア日本語学習者のための中級教材開発

－ 朗読教材を通じて言葉の意味をとらえ、文章アクセントの流れを学ぶ －

拓殖大学

言語教育研究科日本語学専攻

指導教授 : 土淵 知之教授

JUARIAH

2 M607

目 次

はじめに 本論文の目的

I. インドネシア語を母語とする日本語学習者の背景

1. 1 インドネシアの日本語教育の特徴
1. 1. 2 ダルマプルサダ大学の日本語学科の背景
1. 1. 3 ダルマプルサダ大学での日本語教育の主な問題点
1. 2 ダルマプルサダ大学の日本語学科の背景
1. 3 ダルマプルサダ大学における日本語教育のいくつかの問題点
1. 3. 1 漢字の授業
1. 3. 2 文法の授業
1. 3. 3 L. L. の授業

II. 筆者の日本語の習得現状

2. 1 筆者の日本語の学習歴
2. 2 日本語習得の達成度の検証としての文章朗読
2. 3 問題の解決の一方法としての教材作製
2. 3. 1 テスト朗読 解析 1 語句
2. 3. 2 テスト朗読 解析 2 アクセント
2. 3. 3 問題解決の一方法としての教材作成

III. インドネシアの日本語学習者に向けた朗読教材の例

3. 1 取り上げる文例と練習方法の流れ
3. 2 文例 1. 案下路
3. 2. 1 単語の練習とインドネシア語の意味
3. 2. 2 アクセントの流れ
3. 3 文例 2 自然に学ぶ
3. 3. 1 単語の練習とインドネシア語の意味
3. 3. 2 アクセントの流れ
3. 4 文例 3. 父の教えはこれ「渾身」

IV. おわりに

参考文献

資料

本論文の目的

はじめに

インドネシア語を母語とする日本語学習者にとって、日本語を学習する際難しく感じられることはいろいろあるが、特にインドネシア人にとって漢字が一番難しいと考える学習者が多い。漢字だけでなく、文法やアクセントなどについても難しく感じる学習者が少なくない。

そのことは、日本語の研究とのために来日した私にとっても痛切な問題であった。そこで私は、自身の学習歴をふりかえって、どうしたら漢字の習得とアクセントの習得がより効果的にできるか、その教材を開発してみたい。少なくともその方向だけでも探っておきたいとかがえた。それが本論文執筆の動機である。

この論文のなかで、初めに私はインドネシアの日本語学習者の背景を書いた。特にインドネシアの日本語の特徴、ダルマプルサダ大学の日本語学科の背景、プルサダ大学での日本語教育の問題点などである。

次に、私自身の日本語学習歴の実情を紹介した。そういう私が、辰濃和男の『天声人語』「自然編」一編、「人物編」から二編取り上げ、下読みなしに読んで録音し、テープ起こして録音した。その記録は、朗読教材の受容性と確させるものであった。

インドネシア日本語学習者むけの朗読教材の一つ例として、私は、辰濃和男の『天声人語』「自然編」一編、「人物編」という二つから三編の文章を取り上げ、次のような形で、教材として提起した。

1. 全文を、漢字に振りがなを付けて提示する。
2. 漢字を中心とした主な語句を取り出し、読みを平仮名で示し、それにアクセント記号を向け、インドネシア語の訳語を示す。
3. 次に、一文ごとに平仮名、分ち書きにして、アクセントを付ける。
4. 日本人の能力を得て、「録音テープ」単語編を作成する。

<練習方法の流れ>

1. 教材1. を『録音テープ』文章編を聞きながら、黙読する。次いで、だいたい読めるようにまで、朗読練習する。
2. 教材2. を使い、語句の発音練習をし、併せて、語句の意味を理解する。
3. 教材3. を使い、文章・短文のアクセントの流れをつかむ練習する。
4. 全文朗読の完成度を高める。

以上が、教材開発の意義と、教材の具体的な利用法である。

I. インドネシア語を母語とする日本語学習者の背景

1. 1 インドネシアの日本語教育の特徴

インドネシアの日本語教育は、戦後、東南アジア諸国の中でも早い時期にはじめられた。最初の日本語教育機関は一般社会人のための日本語学校「日文化大学院」である。

世界でも有数の日本語学習者人口を有しているインドネシアであるが、決して恵まれた学習環境とはいえない。それにもかかわらず、首都ジャカルタだけではなく、地方でも日本語教育が盛んに行われている。現在、インドネシアにおける日本語教育内容は段階によって科目や教育内容も違う。

以下インドネシアで行われている日本語教育と教育内容について述べる。

1. 高等教育における日本語教育

大学における日本語教育の場合は、1962年にバンドンのパジャジャラン大学に日本語学科が開設されたことに始まる。続いて65年にバンドン教育大学に日本語教育学科が、66年には日本政府の授助でジャカルタのインドネシア大学に日本研究学科が設置された。81年にはスラバヤ教育大学に日本語教育学科が開設されている。近年、各地の私立大学で日本語教育を取り入れるところが多くなり、大学の設置基準があまり厳しくないことも相俟って、高等教育における日本語教育機関が増加し、学習者も急増している。

大学レベルでの日本語教育は、日本語学科系と日本研究学科系の系統によって進められていて、日本語教育だけではなく、日本の文化やマナーなども学ぶ機会が多い。比較的長い伝統を持つ大学には、学士コースに加えて、近年はD3 デイプロマ・コースが開設されている。D3 デイプロマ・コースというのは三年間で終了するコースで、日本の短期大学に当たる。実用日本語の学習を中心に、ビジネス系の科目が組み込まれている。

例えば、ダルマプルサダ大学のD3コースのカリキュラムでは、最終学年で、「観光論」、「ビジネス論」、「出版・編集リテラシー」などの事務的な科目が開設され、卒業生の多数が日系企業に就職している。

だから高等教育における日本語教育の内容は二つに分けている。学士コースとD3プログラムである。学士の場合は日本語の音声、文字、語彙、文法、他に日本文化や日本の歴史なども教えられている。D3 デイプロマ・コースの場合は会話能力を中心に、3年で日本語の会話が上達するように教えられる。もちろん、漢字や日本文化なども教えられる。

2. 中等教育の日本語教育

インドネシア日本語教育は、高等学校の教育課程に日本語が取り入れられていることに大きな特徴があり、日本語学習者のすそ野は広い。日本語は第二外国語として、フランス語、アラビア語、ドイツ語などとともに選択科目として位置付けられている。

1960年代から高等学校の教員で日本語教育が行われていたが、64年には高等学校のカリキュラムの中で正式に日本語教育が認められた。その後75年、84年と10年毎に中等教育カリキュラムの改訂が行われ、80年後半の日系企業のインドネシア進出に呼応する形で、中等教育における日本語教育は著しい発展を遂げてきた。しかし、94年に導入された新カリキュラムは、従来のものとはすっかり形を変えた。従来は2年次で4分野の専攻に分かれ、そのうちの2分野専攻のカリキュラムがアラビア語、日本語、ドイツ語、フランス語の中から一科目を選択し、二年間（220時間）で学習していたが、新カリキュラムで3年次で理科系、社会科計、言語系の3専攻に分かれ、言語系1分野のみ上記外国語の中から1科目を選択し、一年間（280時間）で学習する短期集中のカリキュラムが組まれている。新カリキュラムは96年後半から実施されている。

3. その他の学習機関での日本語教育

学校教育以外でも日本語学習のニーズは高く、多数の民族日本語学校で日本語教育が行われている。ジャカルタ、バンドン、スラバヤ、ジョクジャカルタ、デンパサーなどの大都市には、観光、ビジネス向けの日本語教育を行う日本語学校が多数存在する。特にバリ島には、毎年多くの日本人観光客が訪れるので日本語の需要も高く、民間の日本語学校が多数設置されている。

これらの日本語学校で教えられている日本語レベルは学校格差が大きく、教師の日本語運用能力にも大差が見られる。大学の日本語学科を卒業した教師は少数で、日本語学校の修了生が出身校で教師をつとめるケースが多い。

ジャカルタにあるダルマプルサダ大学でも日本語コースも行われる。ここでは観光やビジネス向けの日本語がおしえられている。

他に、インドネシア政府が開いている公務員のための日本語コース、日系合弁企業で働く現地従業員のための日本語教育、日本留学準備教育などでも実施されている。

1. 2 ダルマプルサダ大学の日本語学科の背景

ダルマプルサダ大学では大学レベルでの日本語教育で、日本語学科系と日本研究学科系の二系統がある。日本語教育だけではなく、日本の文化やマナーなども学ぶ機会

が多い。本学では、学士コースに加えて、D3 デイプロマ・コースが開設されていて、先に紹介したように、最終学年で、「観光論」、「ビジネス論」、「出版・編集リテラシー」などの事務的な科目が開設され、卒業生の多数が日系企業に就職している。

ダルマプルサダ大学の日本文化日本語学科は 1986 年から 2002 年まで約 1763 人の学生が入学したが、528 人しか卒業できなかった。この数を見て、私はアンケートをとって、どうして日本語学科を卒業するのが難しいかと質問した。答えは 80 パーセント、日本語が難しいから卒業出来なくなったという答えがでた。漢字が最も難しく、次いで、文法、それからアクセントが難しく、文章の意味を理解するのが大変である。

それから、単位が足りなくなったため退学した学生も少なくない。4 年間で卒業できる学生は毎年そんなに多くない。(資料 1)

1. 3 プルサダ大学での日本語教育の主な問題点

1. 漢字の授業

インドネシア語で使っている字は 26 字のローマ字である。漢字は使わないし、日常生活でも漢字と会う機会がなかなかないので、漢字の練習もすくなくなる。当然ながら、インドネシア人にとって日本語を学ぶ上で、一番習得困難なことは漢字を覚えることである。学校で勉強した漢字も覚えるのが難しい。

プルサダ大学での漢字の授業は 2 単位しかなかったもので、一週間で 1 時間半しかない。それでは足りないと考える先生方や学生も多い。そのため文法の授業時も漢字を覚えるための漢字の練習をやった方がいいと私は考える。

2. 文法の授業

アンケート調査によるとインドネシア語と日本語では文法も違うので、日本語の文法の中でインドネシア人学習者が困難と感じられるものの 1 位は受身 21 名、2 位は敬語と使役 20 名、3 位自動詞と他動詞で 18 名、4 位がやりもらいと助詞 1 名ずつ、などであった。「1、pg. 1」

また、「学校の先生」と「先生の学校」を取り違えることもある。インドネシア語は修飾語と被修飾語の接続が構造は日本語と逆になっているためである。

例えば：学校の先生は (Guru Sekolah) となり、先生の学校の場合は (Sekolah Guru) となる。他の例を挙げると赤い自動車は Merah Mobil ではなくて、(Mobil Merah) となる。

3. LL (Language Laboratory) の授業

学習困難点は、音の長短の区別、拍のとり方、助詞の用法等、多くの外国人に共通する事項も多いが、学習者の違いに応じ、それぞれと異なる場合も少なくない。

II. 筆者の日本語学習習得と現状

2. 1 筆者の日本語の学習歴

筆者が日本語を勉強し始めたのは、プルサダ大学の文学部日本語日本文化学科で、1994年入学して1998年に卒業し、4年間日本語を勉強した。大学では筆者は日本語だけでなく日本文化や日本歴史なども勉強した。また、母国語（インドネシア語）、言語、インドネシア文化、宗教なども勉強した。4年間日本語を勉強しても授業科目は日本語ではなかったため、日本語の練習も必ずしも充分ではなかった。それから私は、日本語をもっと勉強したい、もっと詳しく知りたいと思い、2001年から日本に留学した。2002年まで東京の新宿にある国際学友会日本語学校で日本語を勉強した。

インドネシアで日本語の教師になるため、日本語も日本語教育の仕方ももっと勉強したかったので、2002年から現在にかけて拓殖大学大学院言語教育学専攻、修士前期課程に在籍し、この修士論文を書いている。

2. 2 日本語習得の達成度の検証としての文章朗読

筆者は拓殖大学大学院に在籍するようになって以来、指導教官から一、二の短編小説や、長編小説の一部、新聞に連載された日本語、言語関係の記事など教材として、週1～2回ペースで、課外の朗読練習を一年もあまり受けその成果を踏まえて、次に記録する作品朗読を試みた。

その分析を通じて、筆者の現時点での漢字、語彙、アクセントの事情を把握することにした。

2. 3 テスト朗読作品 (辰濃和男『自然に学ぶ』「人物編」から)

教育とは何か。それは大自然を子供と一緒に愛することではないか、と和真人さん本紙の多摩・武蔵野版に書いている。「私たち人間を教育することができるもの、それは大自然だけだと思います。大自然こそ永遠、かつしんの教育者なのです」とも書いている。六十七歳になる和さんは、自宅の庭にベンチを置いて通行人に開放したり、吉祥寺で雑学大学を主宰したりして、地域の文化のためにつくしている。

たとえば幼い子供と一緒に一匹のアリの動きを見守る。ベランダに来る小鳥に話しかける。コンクリートの割れ目から伸びる草の勢いに感嘆する。身の回りの一匹のアリ、一羽のとり、一本の草の中に大自然の力を感じとる。幼いころにそういう体験を刻みつけてやるのが大切ではないか、という主張だ。

四十億年もの生命の歴史の長さからみれば、人類の歴史はごく短いものだろう。まして、科学文明の歴史は一瞬の光芒にすぎぬ。その一瞬の光芒で、四十億年の生態系の歴史を破壊する愚を犯してはならぬということに気づかせる。人間は自然と対決する存在ではなく、本来、自然の中の一部にすぎないことに気づかせる。自然に学ぶとすればまず、そのことだろう。

詩人の高木護さんは、若いころ、山小屋に住み、時々、頼まれては子供を預かった。親や教師が「問題児」扱いにする少年たちである。山では、木登りを教えた。食べられる草を教えた。風の音色の違いを教えた。あとは子供たちの自発にまかせたそうだ。

山の中でしばらく暮らすうちに、小鳥の声の意味がわかるといいだす子が現れた。子供の中の心の飢えやひねくれが治ったことを昔は自慢に思ったことがあったが、あれは自分の手柄でも何でもなく、大自然の厳しさ、やさしさが子供たちにさまざまなことを教えてくれたからだろう——高木さんにそんな話をきいたことがある。

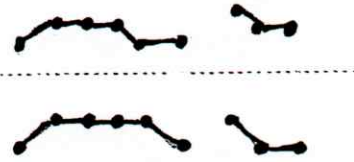
2. 3. 1 テスト朗読 解析1 語句

(正確に読めなかった語)

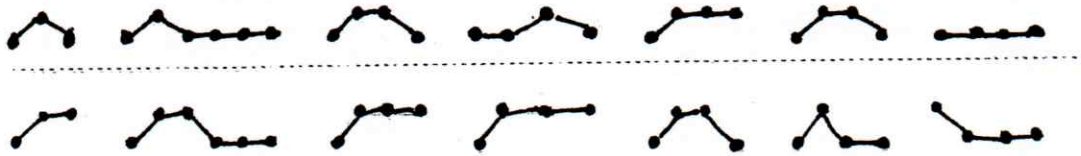
- (1) 和真人 (人名)
- (2) 永遠
- (3) 吉祥寺 (地名)
- (4) 主宰
- (5) 感嘆
- (6) 四十億年
- (7) 高橋護 (人名)

2. 3. 2 テスト朗読 解析2 アクセント〔点線の上段は筆者試読、下段は確認後〕

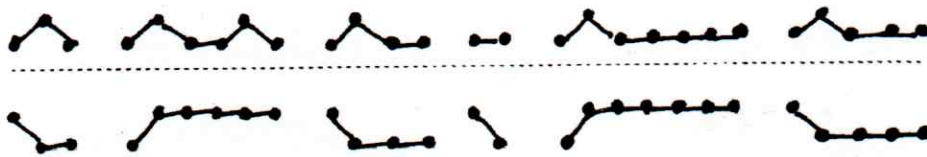
1 きょおいくとは なにか。



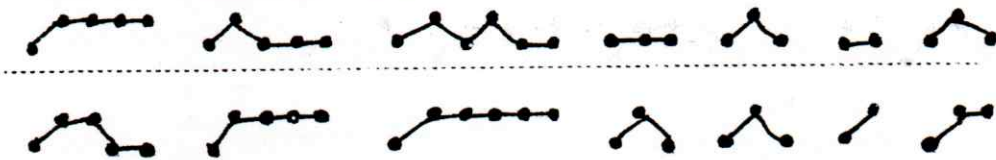
2 それは だいしぜんを こどもと いっしょに あいする ことでは ないかと、



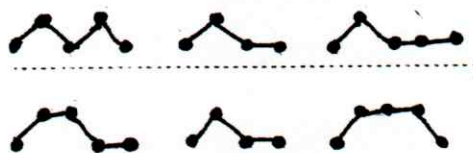
やまと まことさんが ほんしの たま・むさしのぼんに かいている。



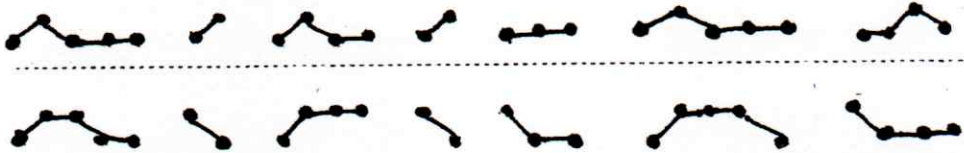
3 「わたしたち にんげんを きょおいくする ことが できる もの、それは



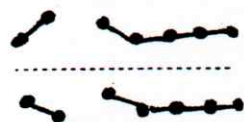
だいしぜん だけだと おもいます。



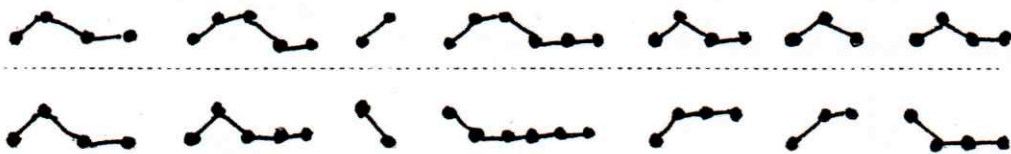
4 だいしぜんこそ えいえん。かつ しの きょういくしゃ なのです」



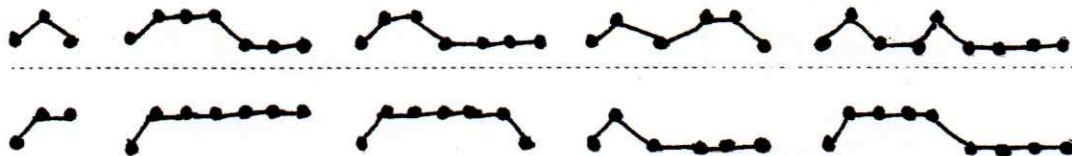
とも かいている。



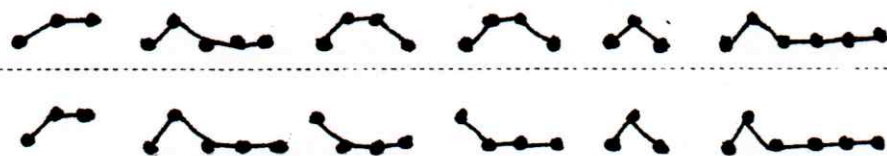
5 ろくじゅう ななさいに なる やまとさんは、じたくの にわに べんちを



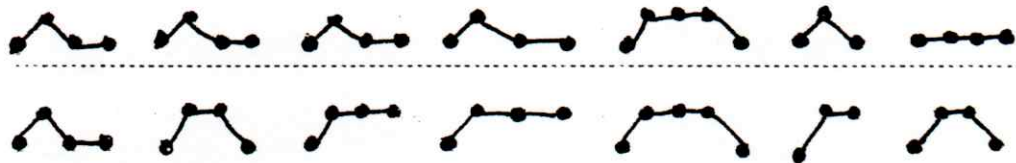
おいて つうこうにんに かいほうしたり、きちょうじて ざつがくだいがくを



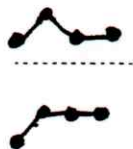
しゅさい したりして ちいきの ぶんかの ために つくしている。



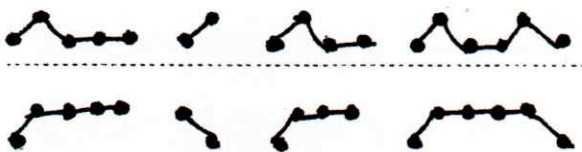
6 たとえば おさない こどもと いっしょに いっぴきの ありの うごきを



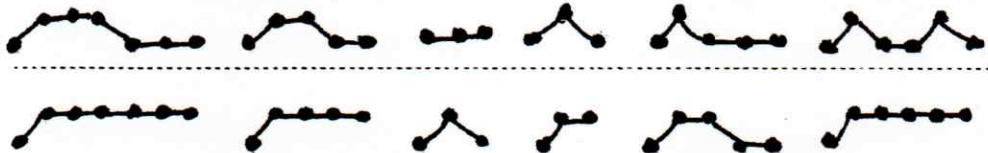
みまもる。



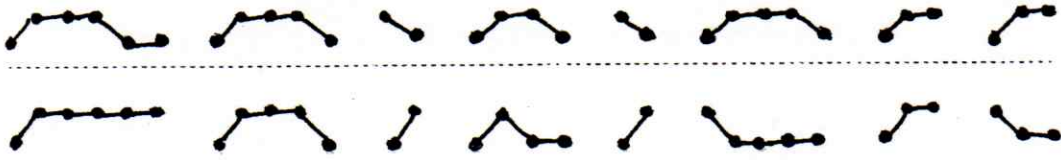
7 ベランダに くる ことりに はなしかける。



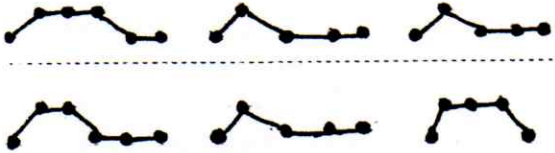
8 コンクリートの われめから のびる くさの いきおいに かんたんする。



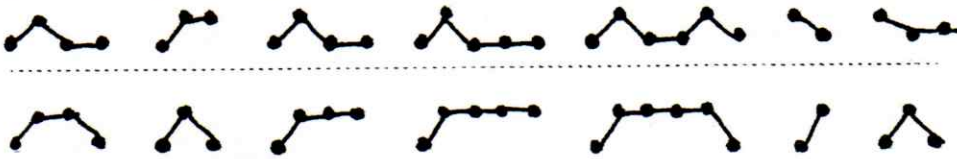
9 みのまわりの いっぴきの あり、いちわの とり、いっぼんの くさの なかに



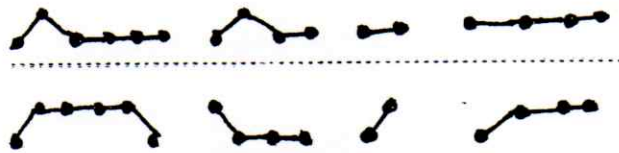
だいしぜんの のうりよくを かんじとる。



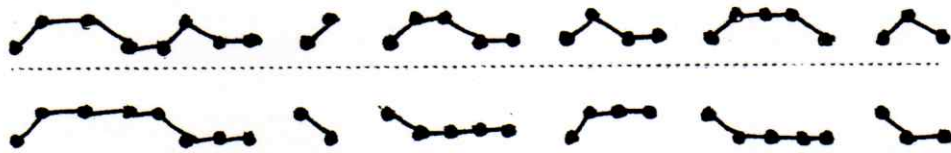
10 おさない ころに そういう たいけんを きざみつけて やる ことが



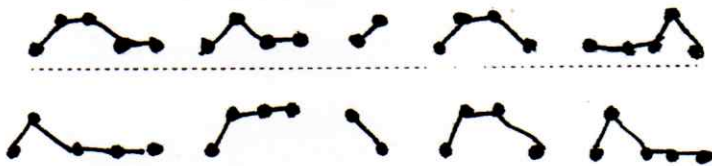
たいせつでは ないかと いう しゅちょうだ。



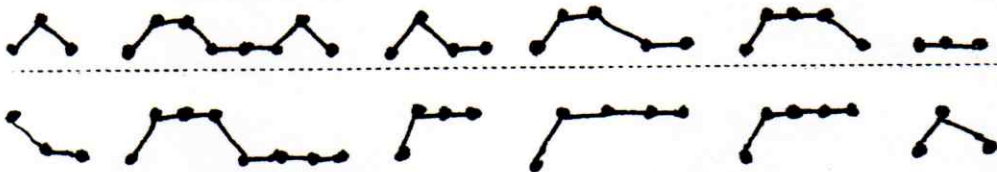
11 よんじゅうおくねん もの せいめいの れきしの ながさから みれば、



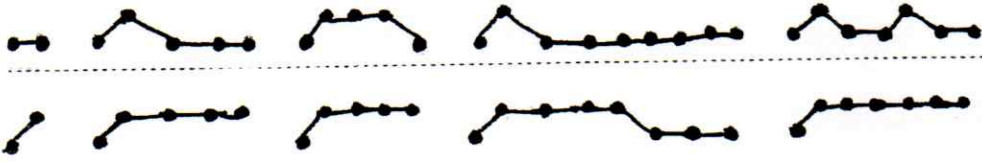
じんるいの れきしは ごく みじかい ものだらう。



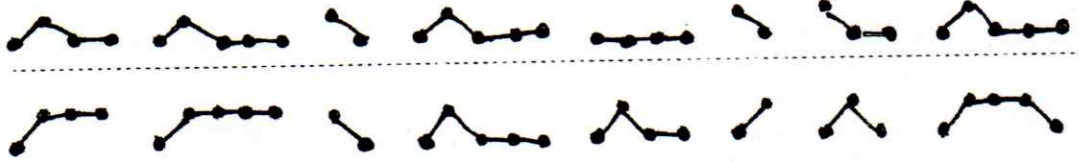
12 まして、かがくぶんめいの れきしは いっしゅんの こうぼうに すぎぬ。



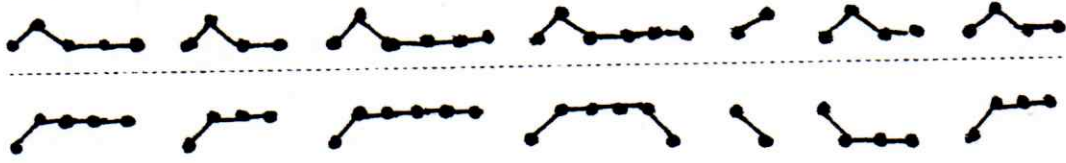
13 その いっしゅんの こうぼうで、よんじゅうおくねんの せいたいけいの



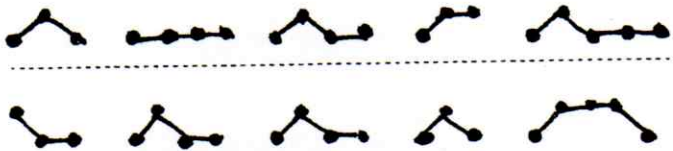
れきしを はかいする ぐを おかしては ならぬと いう ことに きづかせる。



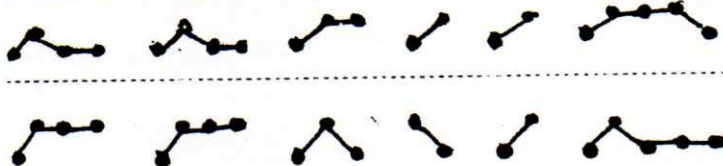
14 にんげんは しぜんと たいけつする そんざいでは なく、ほんらい、しぜんの



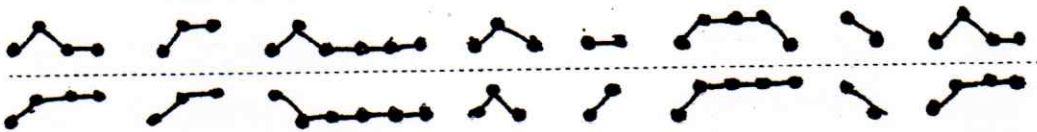
なかの いちぶに すぎない ことに きづかせる。



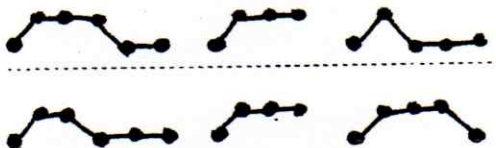
15 しぜんに まなぶと すれば まず、その ことだろう。



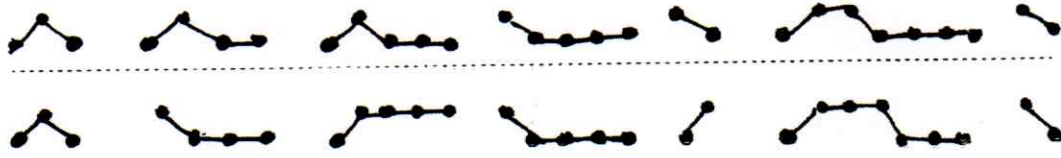
16 しじんの たかぎ まもるさんは、わかい ころ、やまごやに すみ、ときどき、



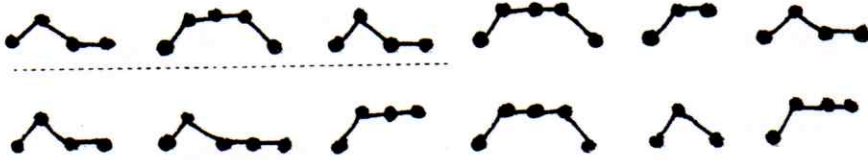
たのまれては こどもを あずかった。



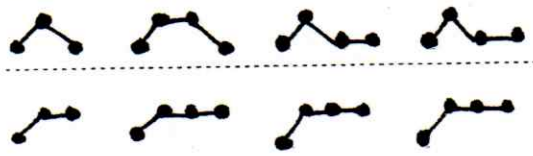
17 おやや きょうしが 「もんだいじ」あつかいに する しょうねんたちで ある。



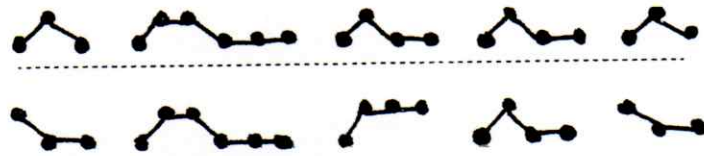
18 やまでは、きのぼりを おしえた。たべられる くさを おしえた。



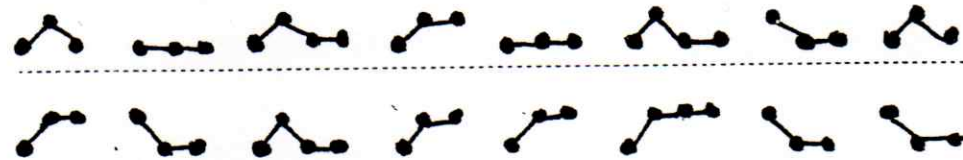
19 かぜの ねいろの ちがいを おしえた。



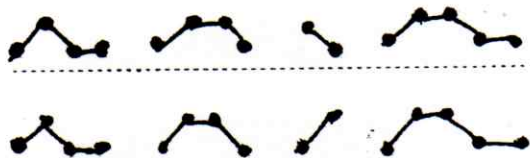
20 あとは こどもたちの じはつに まかせた そうだ。



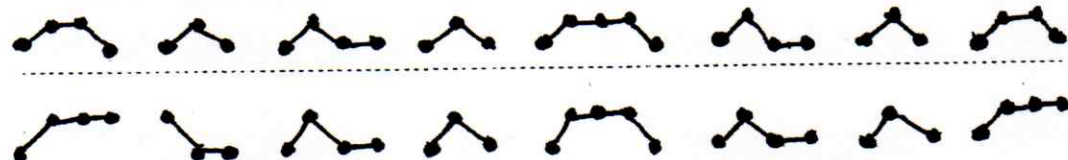
21 やまの なかで しばらく くらす うちに、ことりの こえの いみが



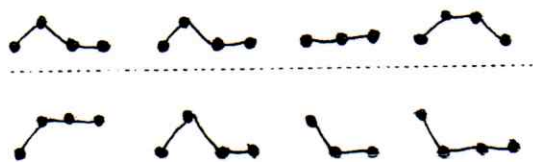
わかると いいだす こが あらわれた。



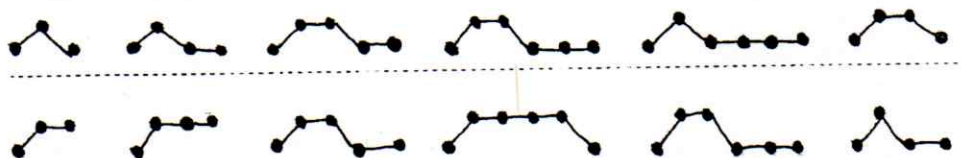
23 こどもの なかの こころの うえや ひねくれが なおった ことを むかしは



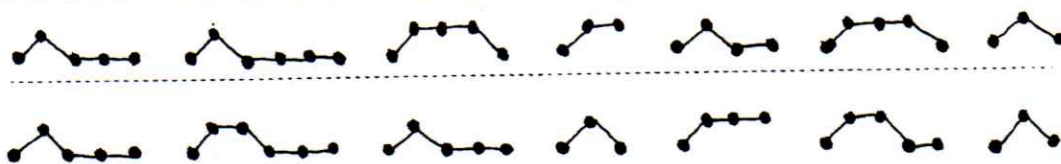
じまんに おもった ことが あったが、



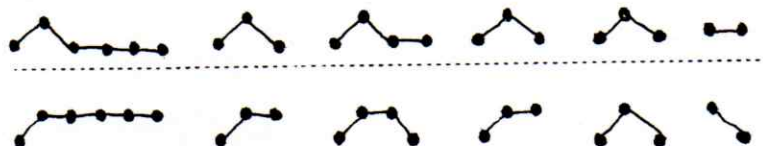
24 あれは じぶんの てがらでも なんでもなく、だいしぜんの きびしさ、



やさしさが こどもたちに さまざまな ことを おしえて くれたから だろう



25 ……たかぎさんに そんな はなしを きいた ことが ある。



2. 3. 3 問題解決の一方法として教材作成

上記のアクセントの解析は、検討の不十分な点があり、正確に筆者の朗読アクセントを記録しきれてはいないが、大体の傾向は捕らえられたと思う。これを見ても、言えることは、筆者にとって、アクセントの習得はいかに困難か、ということである。学習歴の問題もあるが、日本語自体にアクセントよりも文脈が文章の理解の鍵を握っていると握っているという傾向があり、標準(東京)アクセントをしっかりと身に付けていなくても、案外会話が通じるし、日本人の友達も、特に頼まれないかぎり、アクセントが違っていても注意してくれない。

だからといって、日本語学習者がアクセントを軽視してよいということにはならない。やはり標準(東京)アクセントを『アクセント辞典』などを参考にして学ぶべきであろう。そのためにも、教材では単語のアクセントを明記し、その上にたって連語や文章のアクセントが習得できるような配慮が必用であろう。見方を変えれば、筆者の日本語アクセントが不十分なのは、良い教材で学んでこなかったからとも言えるであろう。

その「良い教材」の、一試案として提示するのが、この論文のねらいである。

III. インドネシアの日本語学習者むけ朗読教材の例

3. 1 取り上げる文例と練習方法の流れ

- (1) 辰濃和男の『天声人語』「自然編」「人物編」から各一編を取り上げて教材化する。
 - (a) 教材文の漢字部分に振りがなを付け、全文を提示する。
 - (b) 主な語句を取り出し、アクセント記号を付け、インドネシア語の訳を付ける。
 - (c) 全文を平仮名、分から書きにし、アクセント記号を付ける。
 - (d) 「人物編」から一編、発展・練習教材として、(a)の形で提出する。

- (2) 練習方法の流れ :
 - (a) 記録テープを聞きながら、全文を黙読する。
 - (b) テープを参考に一二回、全文の音読練習をする。
 - (c) (1)の(b)によって、主な語句の読み(アクセント)を練習し、意味を理解する。
 - (d) (1)の(c)によって、読み(アクセント)を練習し、文意を捕まえる。
 - (e) 全文の朗読の質を高めるように、練習する。

3. 2 文例 1. 案下路

案下路

(1984.11.20)

はちおうじこうがい あんげみち ある あわ こう し しょく
八王子郊外の案下路を歩いた。淡い紅紫色のシュウメイギクが咲いていた。ノコ
ンギクも咲いていた。クリの林や梅林のむこうに小高い山々があり、竹林の緑があ
り、そのわきにコナラやアカシデや山桜の黄葉、紅葉がある。秋時雨のもとで、山々
はうるんでみえる。山道を行き、幼時の記憶を拾うように、一つ、二つ、三つとドン
グリを拾う。鮮やかな色をした落ち葉の一枚一枚が雨を吸っている。

こ いろ
モミジは濃いあかね色である。カキの葉は渋くて深いえんじ色である。ケヤキの葉
はらくだ色、といったらいいのだろうか。落ち葉の季節になると、木はそれぞれの個性
しゅちょう わかも うたごえ ある かわ
を主張する。若者たちの歌声がきれぎれにきこえてくる。「歩いてごらん……川
のほとりは……はだしでもいいさ」。

やまみち き き あいだ やすみ もじ う じぶんかって
山道があるくと、木と木の間に「休」という文字が浮かびあがってくる。自分勝手
かいしゃく ひと き よ そ じ やすみ ひと きぎ かこ
な解釈だが、人と木が寄り添うさまを字にすれば「休」になる。人は、木々に囲ま
れ、木々に相対し、木々と語りあうときに、からだ やす ころ ひら ころ やす
体、木々に相対し、木々と語りあうときに、体を休め、心を開き、心を休める。











ぎんざ まつや あそ に もつきん ちんれつ
銀座の松屋デパートの「遊びのギャラリー」で、二メートルもある木琴が陳列され
ているのを見た。ごじゅうろくしゅ おんぼん さくら うめ すぎ くわ ちが き はっそう
五十六種の音板を、桜、梅、杉、桑、とぜんぶ違う木にした発想が
たのしい。カヤの木は軽くて、心やさしい音がするし、イチイの木は高く響く。一片
いっぺん すはだ み き ちが ひょうじょう おどろ
一片の素肌を見て、木がこんなにも違う表情をもっているのかと驚く。













制作者の熊谷健一さんは、木にひかれ、サラリーマンを辞めて、木工の職人になった人だ。なぜ木とつきあうのか。「木は人はだに近い素材で、体温を感じるができるから」と熊谷さんはいう。何十種類もの木を集めて一緒に暮らしていると家族みたいに思えます、ともいう。五十六種の木と相対してただなんとなくポロンポロンとやっていけば、心は休まるに違いない。













3. 2. 1 単語の練習とインドネシア語の意味










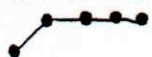


案下路

(1984.11.20)

1. 八王子 : はちおうじ : nama sebuah kota ditokyo

2. 郊外 : こうがい : pinggir kota

3. 案下路 : あんげみち : Nama jalan didaerah takao

4. 歩いた : あるいた : berjalan

5. 淡い : あわい : muda (samar-samar)

6. 紅紫色 : こうししよく : warna ungu tua

7. 咲いていた : さいていた : sedang mekar

9. クリ : くり : nama buah (chestnut)

10. 林 : はやし : hutan

11. 梅林 : ばいりん : hutan ume (ume=nama buah)


12. むこう : むこう : seberang

13. 小高い : こだかい : tinggi dan rendah

14. 山々 : やまやま : pegunungan

15. 竹林 : ちくりん : hutan bambu

16. 緑 : みどり : warna hijau

17. その : その : itu

18. そのわきに : そのわきに : dibalik itu

19. 山桜 : やまざくら : gunung sakura

20. 黄葉 : こうよう : daun yang memerah (daun dimusim gugur)

21. 秋時雨 : あきしぐれ : hujan dimusim gugur

22. うるんで : うるんで : basah

23. みえる : みえる : terlihat


24. 山道 : やまみち : jalan dipegunungan

25. 行き : ゆき : berjalan

26. 幼時 : ようじ : kanak-kanak

27. 記憶 : きおく : ingatan

28. 拾う : ひろう : memungut, mengambil.

29. 一つ : ひとつ : satu

30. 二つ : ふたつ : dua

31. 三つ : みっつ : tiga

32. ドングリ : どんぐり : acorn (buah pohon erk)

33. 鮮やかな色 : あざやかないろ : warna cerah

34. 落ち葉 : おちば : daun yang jatuh (berguguran)

35. 一枚一枚 : いちまいいちまい : lembar demi lembar


36. 雨 : あめ : hujan

37. 吸っている : すっている : menghisap

38. モミジ : もみじ : nama daun

39. 濃い : こい : kental/tua (untuk warna)

40. あかね色 : あかねいろ : merah marun

41. カキ : かき : nama buah (sejenis kesemek)

42. 葉 : は : daun

43. 渋くて : しぶくて : rasa sepat

44. 深い : ふかい : dalam

45. えんじ色 : えんじいろ : merah tua

46. ケヤキ : けやき : nama pohon (zelkova)

47. らくだ色 : らくだいろ : warna coklat (warna unta)


48. いいのだろう : いいのだろう : mungkin baik



49. 季節 : きせつ : musim



50. それぞれ : それぞれ : masing-masing



51. 個性 : こせい : kepribadian



52. 主張 : しゅちょう : desakan, pernyataan yang tegas, tuntutan



53. 若者 : わかもの : anak muda



54. 若者たち : わかものたち : anak-anak muda



55. 歌声 : うたごえ : suara nyanyian



56. きれぎれ : きれぎれ : rusak (parau/terputus-putus)



57. きこえてくる : きこえてくる : terdengar



58. 歩いてごらん : あるいて ごらん : cobalah berjalan



59. 川 : かわ : sungai



60. ひとり : ひとり : pinggir



61. はだし : はだし : telanjang kaki



62. 間 : あいだ : diantara



63. 休み : やすみ : istirahat



64. 文字 : もじ : huruf



65. 浮かびあがってくる : 浮かびあがってくる : muncul, timbul



66. 自分勝手な : じぶんかってな : semau sendiri



67. 解釈 : かいしゃく : interpretasi



68. 人 : ひと : orang



69. 寄り添う : よりそう : menyertai



70. 木々 : きぎ : pohon-pohon



71. 囲まれ : かこまれ : dikelilingi



72. 相對し : あい たいし : berhadapan



73. 語り : かたり : berbicara



74. 語りあう : かたりあう : saling berdiskusi/berbicara



75. 体 : からだ : tubuh



76. 心 : こころ : hati



77. 開き : ひらき : membuka



78. 休める : やすめる : dapat beristirahat



79. 銀座 : ぎんざ : nama daerah ditokyo



80. 松屋 : まつや : nama dept. store



81. デパート : でばーと : departemen store



82. 遊び : あそび : bermain



83. ギャラリー : ぎゃらりー : galeri



84. 二 : に : dua

85. 二メートル : にめーとる : dua meter

86. ある : ある : ada

87. 木琴 : もっきん : jenis alat musik seperti kulintang

88. 陳列されている : ちんれつされている : pameran, pertunjukan

89. 見た : みた : melihat (bentuk lampau)

90. 桜 : さくら : bunga sakura













91. 梅 : うめ : buah ume (rasanya asam)

92. 杉 : すぎ : pohon aras jepang, pohon sedar

93. 桑 : くわ : pohon besaran

94. ぜんぶ : ぜんぶ : semua/seluruhnya

95. 違う : ちがう : berbeda

96. 発想 : はっそう : ide, pemikiran

97. たのしい : たのしい : senang

98. カヤ : かや : nama pohon

99. 軽い : かるい : ringan

100. 心 : こころ : hati

101. やさしい : やさしい : baik hati

102. 音 : おと : suara (untuk alat)

103. 音がする : おとがする : terdengar suara

104. 高い : たかい : tinggi

105. 響く : ひびく : suara berbisik

106. 一片一片 : いっぺんいっぺん : sebagian demi sebagian

107. 素肌 : すはだ : kulit telanjang


108. 素肌を見て:すはだをみて : melihat dengan mata telanjang



109. こんなにも : こんなにも : seperti ini pun



110. 違う : ちがう : berbeda



111. 表情 : ひょうじょう : wajah/air muka



112. 驚く : おどろく : kaget



113. 制作者 : せいさくしゃ : pembuat



114. 熊谷健一 : くまがいけんいち : nama orang jepang



115. サラリーマン : さらりーまん : salariman , pegawai



116. 辞めて : やめて : berhenti



117. 木工 : もっこう : pekerjaan tukang kayu















118. 職人 : しょくにん : pekerja



119. になった : になった : menjadi



120. 人 : ひと : orang

121. なぜ : なぜ : kenapa

122. つきあう : つきあう : bergaul

123. 近い : ちかい : dekat

124. 素材 : そざい : material

125. 体温 : たいおん : temperatur

126. 感じる : かんじる : merasakan

127. できる : できる : bisa

128. 熊谷 : くまがい : nama orang jepang (panggilan kumagaikenichi)

129. いう : いう : berkata, disebut

130. 何十種類 : なんじゅっしゅるい : beberapa puluh jenis

131. 集めて : あつめて : mengumpulkan, berkumpul


132. 一緒に : いっしょに : bersama



133. 暮らして : くらして : hidup



134. 暮らしている : くらしている : hidup dengan mata pencaharian



135. 家族 : かぞく : keluarga



136. みたい : みたい : seperti



137. 思えます : おもえます : terlihat



138. 五十六種の木 : ごじゅうろくしゅのき : 16 jenis pohon



139. ただ : ただ : hanya



140. なんとなく : なんとなく : entah bagaimana (tidak tahu alasannya)



3. 2. 2 アクセントの流れ

案下路

(1984.11.20)

1. 八王子郊外の案下路を歩いた。

——> はちおうじこうがいの あんげみちを あるいた。



2. 淡い紅紫色のシュウメイギクが咲いていた。

——> あわい こうししよくの しゅうめいぎくが さいていた。



3. ノコンギクも咲いていた。

——> のこんぎくも さいていた



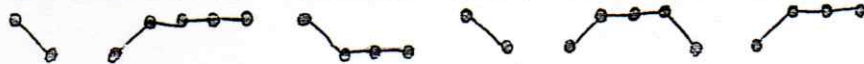
4. クリの林や梅林のむこうに小高い山々があり、竹林の緑があり、そのわきにコ

ナラやアカシデや山桜の黄葉、紅葉がある。

——> くりの はやしや ばいりんの むこうに こだかい やまやまが



あり、ちくりんの みどりが あり、そのわきに のならや



あかしでや やまざくらの こうよう、こうようが ある



5. 秋時雨のもとで、山々はうるんでみえる。

——> あきしぐれの もとで、やまやまは うるんで みえる。



6. 山道^{やまみち}を行き、幼時^{ようじ}の記憶^{きおく}を拾^{ひろ}うように、一つ、二つ、三つとどんぐりを拾^{ひろ}う。鮮^{あざ}

やかな色^{いろ}をした落ち葉^{おちば}の一枚^{いちまい}一枚^{いちまい}が雨^{あめ}を吸^すっている。

—> やまみちを ゆき、ようじのきおくを ひろうように、ひとつ、ふたつ、



みつと どんぐりを ひろう あざやかな いろをした



おちばの いちまいいちまいが あめを すっている。



6. モミジは濃^{こい}いあかね色^{いろ}である。

—> もみじは こい あかねいろである。



7. カキの葉^はは渋^{しぶ}くて深^{ふかい}いえんじ色^{いろ}である。

—> かきのはは しぶくて ふかい えんじいろである。



8. ケヤキの葉^ははらくだ色^{いろ}、といったらいいのだろうか。

—> けやきのはは らくだいろと いったら いいのだろうか。



9. 落ち葉^{おちば}の季節^{きせつ}になると、木^きはそれぞれの個性^{こせい}を主張^{しゅちよう}する。

—> おちばの きせつに になると、きは それぞれの こせいを



しゅちようする。




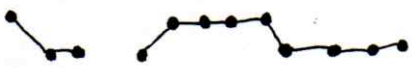
10. ^{わかもの}若者たちの^{うたごえ}歌声がきれぎれにきこえてくる。

—> わかものたちの うたごえが きれぎれに きこえてくる。

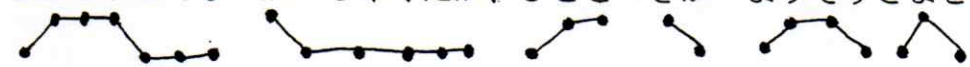


11. 「^{ある}歩いてごらん・・・^{かわ}川のほとりは・・・はだしでもいいさ」。

—> あるいてごらん・・・かわのほとりは・・・はだしでも いいさ。


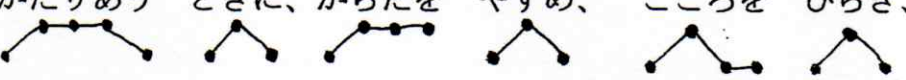

12. ^{やまみち}山道をおあるくと、^き木と^き木の^{あいだ}間に「^{やすみ}休」という^{もじ}文字が^う浮かびあがってくる。

—> やまみちを あるくと、きと きとの あいだに「やすみ」と いう

 もじが うかびあがってくる


13. ^{じぶん}自分勝手な^{かいしゃく}解釈だが、^{ひと}人と^き木が^{より}寄り^そ添う^{さま}さまを^じ字にすれば「^{やすみ}休」になる。

—> じぶんかってな かいしゃくだが、ひとと きが よりそうさまを

 じにすれば やすみになる


14. ^{ひと}人は、^{きぎ}木々に^{かこ}囲まれ、^{きぎ}木々に^{あいたい}相対し、^{きぎ}木々と^{かた}語りあうときに、^{からだ}体を^{やす}休め、^{こころ}心
 を^{ひら}ひらき、^{こころ}心を^{やす}休める。

—> ひとは きぎに かこまれ、きぎに あいたいし、きぎと

 かたりあう ときに、からだを やすめ、 こころを ひらき、


こころを やすめる。



15. 銀座の松屋デパートの「遊びのギャラリー」で、二メートルもある木琴が陳列

されているのを見た。

——> ぎんざの まつやではあとの「あそびの ギャラリー」で、



にめえとるもあるもっきんが ちんれつされているのを みた。



16. 五十六種の音板を、桜、梅、杉、桑、とぜんぶ違う木にした発想がたのしい。

——> ごじゅうろくしゅの おんぼんを、さくら、うめ、すぎ、くりと



ぜんぶちがうきにした はっそうが たのしい。



17. カヤの木は軽くて、心やさしい音がするし、イチイの木は高く響く。

——> かやのきは かるくて、こころやさしい おとがするし



いちいのきは たかくひびく。



18. 一片一片の素肌を見て、木がこんなにも違う表情をもっているのかと驚く。

——> いっぺんいっぺんの すはだを みて、きが こんなにも ちがう



ひょうじょうを もっているのかと おどろく。



19. 制作者の熊谷健一さんは、木にひかれ、サラリーマンをやめて、木工の職人になった人だ。

—> せいさくしゃの くまがいけんいちさんは、きに ひかれ、



サラリーマンをやめて もっこうの しょくにんに なったひとだ



20. なぜ木とつきあうのか。

—> なぜ きと つきあうのか。



21. 「木は人はだに近い素材で、体温を感じることができるから」と熊谷さんはいう。

—> きは ひとはだに ちかい そざいで、たいおんを かんじることが



できるからと くまがいさんは いう。

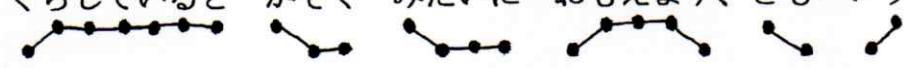


22. 何十種類もの木を集めて一緒に暮らしていると家族みたいに思えます、ともいう。

—> なんじゅっしゅるいもの きをあつめて いっしょに



くらしていると かぞく みたいに おもえます、とも いう。



23. 五十六種の木と相對してただなんとなくポロンポロンとやっていけば、心は休

まるに^{ちが}いない。

—> ごじゅうろくしゆの きと あいたいして ただなんとなく



ポロンポロンと やっていれば、こころは やすまるに ちがいない。



3.3 例2. 自然に学ぶ

自然に学ぶ

(1987.1.27)

教育とは何か。それは大自然を子供と一緒に愛することではないか、と和真人さん本紙の多摩・武蔵野版に書いている。「私たち人間を教育することができるもの、それは大自然だけだと思います。大自然こそ永遠、かつしんの教育者なのです」とも書いている。六十七歳になる和さんは、自宅の庭にベンチを置いて通行人に開放したり、吉祥寺で雑学大学を主宰したりして、地域の文化のためにつくしている。

たとえば幼い子供と一緒に一匹のアリの動きを見守る。ベランダに来る小鳥に話しかける。コンクリートの割れ目から伸びる草の勢いに感嘆する。身の回りの一匹のアリ、一羽のとり、一本の草の中に大自然の力を感じとる。幼いころにそういう体験を刻みつけてやるのが大切ではないか、という主張だ。

四十億年もの生命の歴史の長さからみれば、人類の歴史はごく短いものだろう。まして、科学文明の歴史は一瞬の光芒にすぎぬ。その一瞬の光芒で、四十億年の生態系の歴史を破壊する愚を犯してはならぬということに気づかせる。人間は自然と対決する存在ではなく、本来、自然の中の一部にすぎないことに気づかせる。自然に学ぶとすればまず、そのことだろう。












詩人の高木護さんは、若いころ、山小屋に住み、時々、頼まれては子供を預かった。













おや きょうし もんだいじ あつか しょうねん やま きのぼ おし た
親や教師が「問題児」扱いにする少年たちである。山では、木登りを教えた。食べ
られる草を教えた。かぜ ねいろ ちが おし
風の音色の違いを教えた。あとは子供たちの自発にまかせたそう
だ。













やま なか く
山の中でしばらく暮らすうちに、ことり こえ いみ
小鳥の声の意味がわかるといいだす子が現れた。
こども なか こころ う
子供の中の心の飢えやひねくれが治ったことを なの わかし じまん おも
昔は自慢に思ったことがあったが、
あはれ じぶん てがら なん だいしぜん きび こども
あれは自分の手柄でも何でもなく、大自然の厳しさ、やさしが子供たちにさまざまな
ことを教えてくれたからだろう—— たかぎ はなし
高木さんにそんな話をきいたことがある。

3. 3. 1 単語の練習とインドネシア語の意味
自然に学ぶ













(1987.1.27)

- | | | |
|-----------|---|------------------------|
| 1. 教育 | : きょういく
 | : pendidikan |
| 2. 何 | : なに
 | : apa ? |
| 3. 大自然 | : だいしぜん
 | : sangat natural/alami |
| 4. 子供 | : こども
 | : anak-anak |
| 5. 一緒 | : いっしょ
 | : bersama |
| 6. 愛する | : あいする
 | : mencintai |
| 7. 和真人 | : やまとまひと
 | : nama orang |
| 8. 本紙 | : ほんし
 | : kertas buku |
| 9. 多摩 | : たま
 | : nama daerah Tokyo |
| 10. 武蔵野版 | : むさしのぼん
 | : nama daerah Tokyo |
| 11. 書いている | : かいている
 | : tertulis |













12. 私たち : わたしたち : kita

13. 人間 : にんげん : manusia

14. 教育する : きょういくする : mendidik

15. できる : できる : bisa, dapat

16. だけ : だけ : hanya

17. 思います : おもいます : pikir

18. 永遠 : えいえん : kekekalan, keabadian

19. 真 : しん : benar

20. 教育者 : きょういくしゃ : pendidik

21. 六十七歳 : ろくじゅうななさい : 67 tahun

22. 和さん : やまとさん : nama orang jepang

23. 自宅 : じたく : rumah sendiri














24. 庭に : にわに : dihalaman

25. ベンチ : べんち : kursi /bangku

26. 置く : おく : meletakkan

27. 通行人に : つうこうにんに : orang lewat

28. 開放し : かいほうし : dibuka

29. 吉祥寺 : きちじょうじ : daerah ditokyo

30. 雑学大学 : ざつがくだいがく : universitas Zatugaku (nama kiasan)

31. 主宰し : しゅさいし : menyelenggarakan

32. 文化 : ぶんか : kebudayaan

33. ため : ため : karena, untuk

34. つくしている : つくしている : menyelesaikan

35. たとえば : たとえば : misalnya














- | | | |
|------------|---|----------------|
| 36. 幼い | : おさない | : muda |
| |  | |
| 37. 一匹 | : いっぴき | : satu ekor |
| |  | |
| 38. アリ | : あり | : semut |
| |  | |
| 39. 動き | : うごき | : bergerak |
| |  | |
| 40. 見守る | : みまもる | : memelihara |
| |  | |
| 41. ベランダ | : べらんだ | : beranda |
| |  | |
| 42. 来る | : くる | : datang |
| |  | |
| 43. 小鳥 | : ことり | : burung kecil |
| |  | |
| 44. 話しかける | : はなしかける | : berbicara |
| |  | |
| 45. コンクリート | : こんくりーと | : konkrit |
| |  | |
| 46. 割れ目 | : われめ | : retak/celah |
| |  | |
| 47. ~から | : から | : dari |
| |  | |













48. 伸びる : のびる : tumbuh

49. 草 : くさ : rumput

50. 勢い : いきおい : tenaga

51. 感嘆する : かんたんする : kekaguman

52. 身 : み : badan, sendiri

53. 回り : まわり : sekeliling

54. 一羽 : いちわ : satu ekor

55. とり : とり : ayam

56. 一本 : いっぽん : satu batang

57. 草 : くさ : rumput

58. 力 : ちから : tenaga

59. 感じとる : かんじとる : merasakan





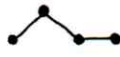








60. そういう : そういう : seperti itu
61. 体験 : たいけん : pengalaman
62. 刻みつけて : きざみつけて : mencetak
63. やる : やる : melakukan
64. 大切 : たいせつ : penting
65. 大切ではない : たいせつではない : tidak penting
66. 主張だ : しゅちょうだ : mengungkapkan
67. 四十億年 : よんじゅうおくねん : 40juta tahun
68. 生命 : せいめい : kehidupan
69. 歴史 : れきし : sejarah
70. 長さ : ながさ : sepanjang
71. ~から : から : dari









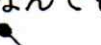

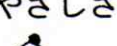
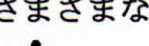
- | | | |
|----------|---|-------------------------|
| 72. みれば | : みれば
 | : kalau melihat |
| 73. 人類 | : じんるい
 | : manusia |
| 74. 短い | : みじかい
 | : pendek |
| 75. 科学 | : かがく
 | : kimia |
| 76. 文明 | : ぶんめい
 | : peradaban |
| 77. 一瞬 | : いっしゅん
 | : sekejap |
| 78. 光芒 | : こうぼう
 | : berkas, sinar, cahaya |
| 79. すぎぬ | : すぎぬ
 | : tidak terlalu |
| 80. 生態 | : せいたい
 | : ekologi |
| 81. 生態系 | : せいたいけい
 | : lingkungan |
| 82. 破壊 | : はかい
 | : kerusakan |
| 83. 破壊する | : はかいする
 | : merusak |

84. 愚 : ぐ : kebodohan

85. 犯して : おかして : melakukan kejahatan

86. ならぬ : ならぬ : tidak menjadi

87. 気づかせる : きづかせる : mengingatkan

88. 人間 : にんげん : manusia

89. 対決する : たいけつする : menghadapi

89. 存在 : そんざい : keberadaan

90. 本来 : ほんらい : dasarnya, pokoknya

91. 一部 : いちぶ : satu bagian

92. すぎない : すぎない : tidak berlebihan

93. こと : こと : hal, sesuatu

94. 気づかせる : きづかせる : mengingatkan


95. 自然に学ぶ : しぜんにまなぶ : belajar dg alami

96. まず : まず : pertamakali

97. 詩人 : しじん : penyair

98. 高木護 : たかぎまもる : nama jepang

99. 若いころ : わかいころ : muda

100. 山小屋 : やまごや : pegunungan

101. 住み : すみ : tinggal

102. 時々 : ときどき : kadang-kadang

103. 頼まれて : たのまれて : diminta

104. 子供 : こども : anak-anak

105. 子供を預かった : こどもをあずかった : menitipkan anak

106. 親 : おや : orang tua


- | | | |
|------------|---|------------------|
| 107. 教師 | : きょうし | : pendidik, guru |
| |  | |
| 108. 問題児 | : もんだいじ | : masalah anak |
| |  | |
| 109. 扱い | : あつかい | : pelaksanaan |
| |  | |
| 110. 扱いにする | : あつかいにする | : mengurus |
| |  | |
| 111. 山では | : やまでは | : digunung |
| |  | |
| 112. 木登り | : きのぼり | : naik pohon |
| |  | |
| 113. 教えた | : おしえた | : mengajarkan |
| |  | |
| 114. 食べられる | : たべられる | : bisa dimakan |
| |  | |
| 115. 草 | : くさ | : rumput |
| |  | |
| 116. 風 | : かぜ | : angin |
| |  | |
| 117. 音色 | : ねいろ | : tone |
| |  | |
| 118. 違い | : ちがい | : berbeda |
| |  | |

119. あと : あと : kemudian

120. 自発 : じはつ : spontanitas

123. まかせた : まかせた : melimpahkan

124. しばらく : しばらく : sebentar

125. 暮らす : くらす : hidup

126. うちに : うちに : pada waktu

127. 小鳥 : ことり : burung kecil

128. 声 : こえ : suara

129. 意味 : いみ : arti

130. わかる : わかる : mengerti

131. いいだす : いいだす : mengusulkan

132. 子 : こ : anak


133. 現れた : あらわれた : diekspresikan

134. 飢え : うえ : lapar

135. ひねくれ : ひねくれ : menjadi bengkok

136. 治った : なおった : sembuh

137. 昔 : むかし : zaman dahulu

138. 自慢 : じまん : kebanggan

139. 自分 : じぶん : diri sendiri

140. 手柄 : てがら : jasa, hasil

141. 何でも : なんでも : apapun

142. 厳しさ : きびしさ : kedisiplinan

143. やさしさ : やさしさ : kebaikan

144. さまざまな : さまざまな : masing-masing


145. 教えてくれた : おしえてくれた : diajarkan



146. ~だろう : だろう : kemungkinan



147. そんな : そんな : seperti itu



148. 話 : はなし : cerita



3. 3. 2 アクセントの流れ

自然に学ぶ

(1987.1.27)

1. 教育とは何か。

—> 教育とは 何か。



2. それは大自然を子供と一緒に愛することではないか、と和真人さんが本紙の

多摩・武蔵野版に書いている。

—> それは 大自然を 子供と 一緒に 愛すること



ことではないか、と やまと まひとさんが ほんしの



たま・むさしのぼんに 書いている。



3. 「私たち人間を教育することができるもの、それは大自然だけだと思います。

—> わたしたち 人間を 教育する ことができ ますもの、それは



大自然 だけだと おもいます。



4. 大自然こそ永遠、かつ真の教育者なのです」とも書いている。

—> 「大自然 こそ 永遠、かつ しの 教育者 なのです」とも書いている。



なのです」とも かいている。



5. 六十七歳になる和さんは、自宅の庭にベンチを置いて通行人に開放したり、

吉祥寺で難学大学を主宰したりして、地域の文化のためにつくしている。

—>ろくじゅうななさいになる やまとさんは、じたくの にわに



ベンチを おいてつうこうにんに かいほうしたり、きちじょおじで



ざつがくだいがくを しゅさいしたりして、ちいきの ぶんかの ために



つくしている



6. たとえば 幼い子供と一緒に一匹のアリの動きを見守る。

—>たとえば おさない こどもと いっしょに いっぴきの ありの



うごきを みまもる。



7. ベランダに来る小鳥に話しかける。

—>べらんだに くる ことりに はなしかける。



8. コンクリートの割れ目から伸びる草の勢いに感嘆する。

—> コンクリートの われめから のびる 草の いきおいに

かんたんする。

9. 身の回りの、一匹のアリ、一羽の鳥、一本の草の中に大自然の力を感じとる。

—> 身のまわりの いっぴきの あり、いちほの とり、いっぼんの 草の

なかに だいしぜん の うりよくを かんじとる。

10. 幼いころにそういう体験を刻みつけてやるのが大切ではないか、という主張だ。

—> おさない ころに そういう たいけんを きざみつけて やることが

たいせつでは ないかと いう しゅちょうだ。

11. 四十億年もの生命の歴史の長さからみれば、人類の歴史はごく短いものだろう。

—> よんじゅうおくねんもの せいめいの れきしの ながさから みれば、

じんるいの れきしは ごく みじかいものだろう。

12. まして、^{かがくぶんめい}科学文明の^{れきし}歴史は^{いっしゆん}一瞬の^{こうぼう}光芒にすぎぬ。

—> まして、^{かがくぶんめい}かがくぶんめいの ^{れきし}れきしは ^{いっしゆん}いっしゆんの ^{こうぼう}こうぼうに

^{すぎぬ}すぎぬ。

13. その^{いっしゆん}一瞬の^{こうぼう}光芒で、^{よんじゅうおくねん}四十億年の^{せいだいけい}生態系の^{れきし}歴史を^{はかい}破壊する^ぐ愚を^{おか}犯してはならぬ

ということに^き気づかせる。

—> その ^{いっしゆん}いっしゆんの ^{こうぼう}こうぼうで、^{よんじゅうおくねん}よんじゅうおくねんの

^{せいだいけい}せいだいけいの ^{れきし}れきしを ^{はかい}はかいする ^ぐぐを ^{おか}おかしては ^{ならぬ}ならぬと

 いうことに ^き気づかせる。

14. 人間は^{しぜん}自然と^{たいけつ}対決する^{そんざい}存在ではなく、^{ほんらい}本来、^{しぜん}自然の中の^{なか}一部に^{いちぶ}すぎないことに^き気づかせる。

—> ^{にんげん}にんげんは ^{しぜん}しぜんと ^{たいけつ}たいけつする ^{そんざい}そんざいでは ^{なく}なく、^{ほんらい}ほんらい、

^{しぜん}しぜんの ^{なか}なかの ^{いちぶ}いちぶに^{すぎない}すぎない ^{こと}ことに ^き気づかせる。

15. ^{しぜん}自然に^{まな}学ぶとすればまず、そのことだろう。

—> ^{しぜん}しぜんに ^{まな}まなぶと ^{すれば}すれば ^{まず}まず、^{そのこと}そのこと ^{だろう}だろう。

16. 詩人の高木護さんは、若いころ、山小屋に住み、時々、頼まれては子供を預かった。

—> しじんの たかぎ まもるさんは、わかいころ、やまごやに すみ、

 ときどき、たのまれては こどもを あずかった。

17. 親や教師が「問題児」扱いにする少年たちである。

—> おやや きょうしが 「もんだいじ」 あつかいに する

 しょうねんたちで ある

18. 山では、木登りを教えた。

—> やまでは、きのぼりを おしえた。

19. 食べられる草を教えた。

—> たべられる くさを おしえた。



20. 風の音色の違いを教えた。

—> かぜの ねいろの ちがいを おしえた。



21. あとは子供たちの自発にまかせたそうだ。

—> あとは こどもたちの じはつに まかせた そうだ。

22. ^{やま} ^{なか} 山の中 ^く でしばらく ^{くらす} 暮らすうちに、^{ことり} ^{こえ} ^{いみ} 小鳥の声の意味 ^こ ^{あらわ} がわかる ^こ ^{あらわ} といいたす ^こ ^{あらわ} 子が現れた。

—> やまの なかで しばらく くらす うちに、ことりの こえの いみが

 わかると いいだす こが あらわれた。




23. ^{こども} ^{なか} ^{こころ} 子供の中の心 ^う の ^う 飢えや ^な ^お ひねくれ ^な ^お が ^な ^お 治った ^な ^お ことを ^{むかし} ^{じまん} ^{おも} 昔は ^{むかし} ^{じまん} ^{おも} 自慢に ^{おも} 思った ^{おも} ことが ^{おも} あった ^{おも} が、

—> こどもの なかの こころの うえや ひねくれが なおった ことを

 むかしは じまんに おもった ことが あったが、


24. ^{じぶん} ^{てがら} ^{なん} あれは ^{じぶん} ^{てがら} ^{なん} 自分の ^{じぶん} ^{てがら} ^{なん} 手柄でも ^{なん} ^{なん} 何でもなく、

—> あれは じぶんの てがらでも なんでもなく、


25. ^{だいしぜん} ^{きび} 大自然の ^{だいしぜん} ^{きび} 厳しさ、^{こども} ^{おし} やさしさが ^{こども} ^{おし} 子供たちに ^{おし} ^{おし} さまざまな ^{おし} ^{おし} ことを ^{おし} ^{おし} 教えて ^{おし} ^{おし} くれた ^{おし} ^{おし} から ^{おし} ^{おし} だろう

—> だいしぜんの きびしさ、やさしさが こどもたちに さまざまな

 ことを おしえて くれたから だろう


26. ^{たかぎ} ^{はなし} 高木さんに ^{たかぎ} ^{はなし} そんな ^{たかぎ} ^{はなし} 話を ^{たかぎ} ^{はなし} きいた ^{たかぎ} ^{はなし} ことがある。

—> たかぎさんに そんな はなしを きいた ことが ある。


3. 4 文例3. 父の教えはこれ「渾身」 幸田 文

ちち おし こんしん こうだ あや
父の教えはこれ「渾身」 幸田 文

(1978.6.18)

ちち ちちうえ じふ げんぶ
父、父上、慈父、嚴父、おとうさん、とうさん、おやじ、おとっさん、ちゃん。

てがみ あいてがた ちち そんぶ じぶん ちち くふ しんしゅう
手紙では、相手方の父は尊父、自分の父は愚父になる。信州では、とっさ、あきた

あな おきなわほんとう
あな、沖縄本島では、すう、あるいは、たありい。きょうじゅうはちにち ちち ひ
きょう十八日は父の日である。

ひと こうだあや ちち
人にすすめられて幸田文さんの『父・こんなこと』を読んだ。「父」をえが
では、この作品がさくひん ばつぐん
はたき、ほうきのつか かた
はたき、ほうきの使い方、ふきそうじ しかた しょうじ
張り、米とぎ、くさど
張り、米とぎ、草取りにいたるまで、ちちろはん むすめ
父露伴は娘にきびしくおし
その教え方を娘
はくめい か
は克明に書きしるしている。たくまぬさいみつびょうしゃ なか
たくまぬ細密描写の中から、ろはんろん ちちおやろん こそだ ろん
露伴論・父親論・子育て論
がう
が浮かびあがってくる。

はたき一つでも「はたきのふさ みじか
はたきの房を短くしたのは何のたため、かる
軽いのは何のたため、だいいち
第一お
まえのめ
まへの目はどこを見ている、はたきのどこがしょうじ
障子のどこへあたるのだ。それにあの音
は何だ。なん
あんなにばたばたやってみろ、いじ わる
意地の悪いしゅうとさんならかたきう
敵討ちがはじま
ったよってかけだすかもしれない」というちようし
調子でしごく。こ
子ジシを谷にたに つき お
突き落とす勢
いである。

だんせいときびかん だいひょうてき さっか
男性的美感の代表的な作家といわれるぶんごうろはん
文豪露伴が、むすめ
娘にぞうきんがけを教
るず
る図は、そうぞう
想像するだけでもじつにたのしい。ふきそうじ
ふき掃除でもまきわりでも、ろはん おし
露伴の教え

かた 方は①やらせて見る、②やってみせる、③もう一度やらせて見る、を基本きほんにしている。

ひんこん なか そだ ろはん しょうねんじだい そうじ こめ なん 貧困ひんこんの中で育そだった露伴ろはんは、少年時代しょうねんじだいから、掃除そうじ、米こめとき、何でもなんやらされた人ひとである。ぞうきんがけの時ときの軽快けいかいなこなしは「舞台ぶたいの人ひとのとりなりに似にていた」そうだ。

「はたらいはたらいている時ときに未熟みじゆくな形かたちをするようなやつは、問題もんだいにならん。(はたらく姿すがたは)目めにさわやかでなくてはいけない」というくだりくだりを讀よむと、恐れ入おそはいりましたと頭あたまを下さげざるをえない。

けっきよく ちち おし わざ こんしん 結局けっきよく、父ちちの教おしえたものは技わざではなくて、これ渾身こんしんということであつた、と文あやさんは書かく。これ渾身こんしん、の心こころを渾身こんしんの力ちからでしつけること、これがなかなかむずかしい。ごろ寝族ねぞくの父親ちちおやたちよ、奮起ふんきしよう。

I V. おわりに

1. 筆者の日本語学習の中間決算といった形で文章朗読を行ない、その分析を通じて自分自身の日本語学習の問題の一端を明らかにした。明らかになったのは、漢字語句を中心とした語彙の習得不十分さと、アクセント習得上の欠陥である。
2. 筆者の問題点はダルマプルサダ大学で学ぶ日本語学習者、ひいてはインドネシアの日本語学習者に共通するものがあるといえよう。
3. その解決、改善の一方法としての、日本語朗読練習教材の開発を志した。
4. この教材開発はあくまで試案であって、今後の開発の方向は、日本語・日本文化学習の各方面の需要に応じた内容の文章の教材化ということであろう。
5. この教材開発に当たって、正確を期すためには、日本人の日本語の専門家の協力が不可欠である。今回ご指導いただいた土淵教授に紙面を借りて厚くお礼申し上げます

以上、朗読練習の流れを述べた。教室で教える時はひと通り文章を通読してから、漢字（単語）の練習やアクセントの練習ということになると思う。次はどんな朗読教材がダルマプルサダ大学に合う教材か、大学の時間割、大学の学習者の要求や能力などを考慮して、作成することを今後の課題としたい。

参考文献

1. 川瀬生郎、『日本語教育学序説』、近代文芸社、2001。
2. 『アジアにおける日本語教育』、本名信行・岡本佑智子（編）、三修社、2000。
3. 金田一春彦、編『日本語の姿』、大修館書店、1990。
4. 興津・憲作『外国語から見た日本語』近代文芸社、1992。
5. 末永 光 『Kamus Baru Jepang-Indonesia』 『現代日本語インドネシア語辞典』東京大学書林、1975。
6. NHK 編『日本語発音アクセント辞典』改訂新版に本放送協会平成5
7. 『新明解国語辞典』第5版、三省堂